

# 笑い飛ばしてウサ晴らし

## 「笑い講」

杉本 順則 陸自77

毎年12月の第1日曜日、山口県防府市では鎌倉時代から伝わる奇祭「笑い講」があり、1年の憂さを「ワーツハツ」と笑い飛ばす神事が行われる。

笑う門には福来たる。頭屋(当番)の家に集った紋付きはかま姿の「講員」ら約15人が、神棚に祝詞をあげ酒宴で盛り上がった後、太鼓の音とともに、神の枝を手に3回ずつ大笑いする。笑いが足りないとい酒をつがれ、笑い直しを命じられることも。1回目は今年の収穫に感謝し、2回目は来年の豊作を祈り、最後は一年の悲しみや苦しみを笑い飛ばすという意味がある。参加者は「震災や台風で被災した方々も、つらかったことを笑いのパワーで吹き飛ばしてほしい」との願いが毎年のことだ。確かに「笑い」は、何かしらのパワーを持っている。まず、大声で笑うと、いろいろなることが「小さく」見える。大変だと思っていたことが、大したこととでなく思えるのだ。つらいときや悲しいときは、大笑いするとい、とはいえ、キツカケがないのに笑っていると、変人だ。まるで思い出し笑いみたくてもあるし、気味も悪い。

笑いのキツカケになるものといえは、昭和末期、わが独身時代に「笑い袋」なるおもちゃがあった。袋を押すと軽快な笑い声が出るあれだ。つられて大笑いすれば、ストレス解消になった記憶がある。あの笑い袋なら笑いのきツかけにもつてこいだ。今では100円ショップでも販売しており、笑い声の他にも色々な声が出る〇〇袋として売っている。

笑い袋に近いのは、昔「指圧のころ、母「ころ」」の故・浪越徳治郎氏。「アーハツハツハツ」と笑っていたなあ。「気合いだア！ 気合いだア！」のアニメル浜口氏も「ワーツハツハツハツ」の3乗。つられてついつい笑ってしまうのである。

おかしくなくてもその笑い声につられて笑い、そのことで感情も高揚する。笑うことで何か抱えていたモノを吐き出すのではないだろうか。その吐き出したモノは「感情の高まり」のパワーで、次から次に感情パワーが刺激されて、無表情や、鉄仮面が感情豊かになり、笑顔が他の人の笑顔につながるのだから。最近では「笑いヨガ」などというものもある。このヨガも、前述の「笑い講」もまず笑い声が先に来る。結果の笑いではないのだ。その笑いをきっかけに、見物人の笑いを誘い、笑いで憂さを辛かったことを吹き飛ばそうとしている。笑いがモヤモヤなどを吹き

飛ばす手段なのだ。

「冷笑するべからず、大笑すべし」  
そういう教えを上司に受けたことがある。「ガツ、ハツハツハツ」と大笑いする上司の前では、失敗し叱責を受けている身としては、笑う場面ではないと思いつつも、ついつい移ってしまい、苦笑いか、大笑いまで行かなくても小笑いになってしまう。そして、部屋を出るときは、失敗したことはさておき、何故か「次は頑張るぞ！」という気持ちにさせてくれたのを思い出す。そんな「大笑」がいい。相手にパワーが伝わるのだ。

年末年始には、大笑いするためかお笑いのテレビ番組が多くなる。落語家や漫才師など笑いを提供するプロにとつては、自らが笑ってしまったては芸でないのでは？ と思っていた。しかし、何度目かのお笑いブームが下火になったが、自ら大笑いするコンビなどもバラエティなどの司会などで生き残っている。個人的には、「笑いを提供するプロは、自ら笑うな！ 自分の笑い声で笑いをとるな！」と思っていたのに、市民権は得てきているようだ。「さんま」も「たけし」もよく笑っているし、「笑点」の落語家にもその傾向は見られるのだから。最近では「それもあかな？」とも思えるようになってきた、ナリ。